

敷島自治区

調査団体名	： 敷島自治区	団体代表者名	： 後藤哲義(現自治区長)
設立年	： 2007(平成17)年	対応してくれた人の名前	： 鈴木正晴 2013年～16年敷島自治区長 現在「顧問」
活動拠点	： 豊田市杉本町にある通称「敷島会館」	調査員	： 山本薫久
取材日	： 2017年11月8日	レポート作成者	： 山本薫久

活動内容

2007年に旭町は豊田市と合併し、旭地区の自治組織のひとつとして千人余りの敷島自治区(当時の敷島小学校区範囲)が誕生した。合併した旧町村は合併を機にどこも地域を自治的に運営しようというのが課題であったが、なかでもこの敷島自治区の取り組みは大きな成果を生み、先進自治区として評価されている。流出人口が多い農山村部へのUIターン者対策として、合併後の豊田市は2010年に「空き家情報バンク」を開設した。登録される空き家が10件程度なのに県内外200世帯400人以上の待機者リストができてしまう状態のなか、敷島自治区を先頭に旭地区で57世帯139人(2018年2月末現在)の移住を実現している。農山村に暮らそうとする若者をはじめとする移住希望者を受け入れようとする住民側の取り組みの成果が結果としてあらわれたものである。この状況を生み出した敷島自治区の役割は大きい。積極的にUIターン者を受け入れようとする姿勢もそのひとつでこの姿勢が旭地域に波及したと自負している。

2010年には敷島自治区では「ときめきプラン」という過疎化、高齢化による地域の活力低下に対する「総合的な計画」自治区の進むべきみちしるべがで、課題解決型の自治活動が開始されていた。「ときめきプラン」で2010年にたてた目標値の5年後の目標値⇒到達点を列挙してみよう。自治区人口1050人⇒1063人、体験交流人口500人/年⇒3500人/年、特産物出荷者100戸⇒37戸、合併浄化槽38%⇒38%、つどいの家(地域の居場所づくり)3戸⇒8戸、防犯灯設置数135基⇒120基。人口減少にブレーキがかかるなど重要な前進が示されるとともに、住民にとって重要な課題を総合的に評価し今後の課題に真摯に向き合おうという姿勢がある。

2014年には「しきしま ときめきプラン2015」を鈴木正晴自治区長、鈴木辰吉プラン策定委員長のもと自治区の先輩、若者、女性など20名でプラン策定委員会を構成し検討。策定にあたり行った「私と家族の将来像」の全戸アンケート調査では「10年後、半数の町内会が限界集落、5戸に1戸が空き家という消滅に向かう容赦のない地域の姿を浮き彫りに」した。そのことを住民に伝えプランの検討と住民の主体的な参画を促すため敷島自治区内の老若男女、UIターン者、子育て世代、若い農家、中学生が公開討論会に参加。またプランへの意見を寄せてもらい、2015年3月に自治区総会で全会一致で採択。以後、この計画に基づき自治区運営を推進させている。今回の最大の特徴は、地域課題と実践する部局を一致させたことである。プランには7つの分野があるが、分野に対応した「部」を編成したこと。さらに企画部をもうけ、7つの分野の進捗状況をみて励ましアドバイスするしくみを創設したこと。分野別計画を下に簡略して列挙したい。

- 1、定住促進 都市住民との交流を通して敷島ファンを増やし、地域活動への参加や農産物の直接販売につなげるほか、空き家や有休農地の活用による定住へと結びつけ、地域活力の維持、過疎の抑止を図る。
- 2、産業振興 特産化によるブランド価値を高めつつ、生産物、収穫物が現金収入の拡大・消費につながる流通を推進する。段階的な6次産業化を目指し、拠点施設(加工場、農家レストラン等)の設備・展開を推進する。新規担い手と共同して耕作放棄地の解消を進める。木材・森林の利活用を高め、林産業の振興を図る。
- 3、環境保全 豊かな自然環境や美しい景観は地域の自慢であり、人に安らぎと癒しをもたらす、かけがえのない財産である。この財産を守るための共同管理体制の構築を目指すと共に、都市部企業など担い手を地域外にも広く求めながら、適性な維持・保全を図る。
- 4、高齢者福祉 高齢社会の進展を踏まえ、高齢者が住み慣れた地域で生き生きとらせるよう向こう三軒両隣、世代を超えて支え合う地域社会づくりをめざす。また、高齢者が生涯現役で地域社会の担い手として活躍できるよう健康づくりに向けた取り組みを推進する。

5、文化・スポーツ ふるさとの誇りであり、心のよりどころとなる棒の手、打ち囃子などの伝統文化、有形文化財を後世に継承する。また、より多くの住民がスポーツや文化芸能に親しみ、健康増進や交流が図れる環境づくりを進める。

6、次世代育成 地域の宝である子どもたちを、地域が一丸となり守り育てる。このため、子どもたちが自然の中で伸びのびと遊べる「つどいの場」を整備し、高齢者を含め世代を越えた見守りの仕組みをつくる。また、若者の地域への定着を、地元企業の職場体験を通して推進する。

7、安全安心 安全安心な暮らしの実現において、行政がカバーできる領域には限界がある。真の「安全安心」は住民自らの手で創出しなければならない。住民自らが「できること」をしっかりと見極めて、確実に実践することでその実現を図る。

キャッチフレーズ：

「しきしま暮らしの作法」を守り

基本方針1 過疎化ストップにチャレンジする

基本方針2 しきしまの宝を守る

基本方針3 安心して暮らせる基盤をつくる

会のモットー(何を大切にしているか)：

しきしま 暮らしの作法 (別途掲載)

連携している団体・専門家・自治体など：

名古屋大学、東京大学、学泉大学、おいでんさんそんセンター、豊田市、豊田市旭支所、豊田市森林課、なりわい塾トヨタ紡織、住友ゴム、M-easy など

現在直面している課題：

個人的に思うこととアンケート調査などから浮かび上がっている「しきしまの困りごと」(課題)のなかで特に気がかりなもの

- ・若い人は仕事・子育て・お役・消防団・子どもや家族の送り迎えなどに忙殺され、自治活動に参画する機会がなかなかない。
- ・担い手が高齢化しているが、若者への引継ぎが十分でない。
- ・一人暮らし老人の増加や認知症対策。
- ・買い物・交通の弱者対策
- ・災害対策

今後やってみたいこと：

「ときめきプラン」の実行。地道、確実に実施していくことだと思う。

その他

杉本子ども園(敷島自治区内)が今年1学級増。年少学級が2つになった。移住定住対策が実を結んできていると実感する。この2年間ですでに10数軒の移住が実現した。Iターン、Uターン、Jターンのすべてのケースがある。

森づくりも敷島自治区内9分の9で森づくり会議(豊田市森林課が進める地域ごとの山主さんの集まり)が立ち上がり、森づくり団地化も進み森林での施業も開始されているところである。

空き農地の増加もみられない。農産物の流通ルートも拡大している。農協、やまのぶ(正晴会)、メル友会、いのはな農園、てくてく農園など。

若いお母さんたちでつくるクッキーなどの製造販売(杉ん工房)や農家民宿のちんちゃん亭など手作りの地域産業も活性化している。

たいへん励まされうれしく思っている。

写真



敷島自治区メンバー



討論風景

しきしま暮らしの作法

私たちは、しきしまを豊かな暮らしの場として
未来につながることを決意し、

しきしまを愛する全てのの人々を温かく迎え入れます。

ここに暮らしの作法十か条を定め、これを守ります。

第一条 家、田畑、山林は地域共有の風景と考えよう。

第二条 家の周りをきれいにし暮らそう。

第三条 空き家を放置するのはやめよう。

第四条 田畑や山林を荒らさず、生業の種を育てよう。

第五条 高齢者が生涯現役で暮らせるよう支えあおう。

第六条 子どもは地域の宝、よその子も大切に育てよう。

第七条 歴史や伝統文化を地域の誇りとして守ろう。

第八条 あいさつを励行し、安全安心な地域をつくらう。

第九条 自分でできないことは、みんなで助け合おう。

第十条 地域の未来のために何ができるか考え行動しよう。

平成二十七年三月 敷島自治区